ハルピンのユダヤ人協会と日本の占領政権との関係について（1931年から1945年）

ロマーノヴァ・ヴィクトリア

1931年９月の日本による満州占領と満州国傀儡政権の形成期にあってハルピンユダヤ人協会はよく組織化された集団であった。この協会は、亡命ロシア人のあらゆる政治的組織とは異なり、主要にはハルピンのユダヤ人移民の利益を擁護するものであった。協会の指導者は、A.H. カウフマンという人物であり、彼は高い倫理的素養を持ち、優秀な組織者であり確乎たるシオニスト[1]であった。A.M. キセーレフはラビ[2]としてユダヤ人協会の歴史において重要な役割を果たしていた。

初期にあっては、長期間にわたって政治的な動揺が常態化していたハルピンにおいて、政権が変わることはユダヤ人協会の活動に実質的な影響を与えることはなかった。もっぱら生き抜いていかなければならない状況が変化した、ということだった。生き抜くのに必要な条件は、新たな政権との関係を樹立することだった。

次の点を明確にしておかなければならない。満州を実質的に統治していた日本の軍政当局は、当初、ハルピンのユダヤ人との関係において特別な施策を行うことは無かった。軍政当局は、ハルピンのユダヤ人協会に対して他の多くのロシア人の小規模な協会と同様に対応していた。その一方で、この対応は、世界のユダヤ人とヨーロッパの発展におけるユダヤ人の役割に対する日本人の認識が反映したある種の独自性に特徴づけられていた。全体として第一次大戦と第二次大戦の戦間期における日本人のユダヤ人に対する認識は、条件付きながらも二つの異なった対応を生み出していた。第一は、ユダヤ人は世界が発展する上で、大きな経済的そして政治的影響力を持っており、有益なユダヤ人を日本のために利用すべきである、という対応である。第二は、彼らは、革命の脅威も含め、日本に脅威をもたらしてきた陰謀者たちである、とユダヤ人を捉えて対応しようとするものである[3]。

日本人たちの対応は、反ユダヤ主義に感化されたハルピンの白系ロシア移民の極右的な勢力を活性化させことになった。新しい政権は、ハルピンに警察と憲兵隊を導入する際に、この極右的な勢力に依拠した。K. ラドザエフスキーが指導者となり1931年５月に結党したロシア・フアシスト党は、特別な支援を得ることができるようになった。1930年代初頭における満州の日本政権は、ロシア・フアシスト党の反ユダヤ主義的活動に反対もしなかったが、その一方でハルピンユダヤ人協会に反ナチス的プロパガンダを行うことも禁止しなかったし、ドイツのユダヤ人に対する援助の表明を禁止することもなかった。

1936年になってハルピンのユダヤ人たちと日本の政権との関係が変化することになった。

これらの変化は、五万人におよぶドイツのユダヤ人を満州に移住させようとする「河豚（フグ）計画」[4]－それは日本のブルジョア政権において影響力を持っていた代表者たちが支援していのだが－の形成と関係していた、と推定される。その計画の根底には、極めて現実的な目的－満州の開発のために教育を受けていて規律ある労働者としてのドイツのユダヤ人を利用する－が存在していた。このことが、日本人にハルピンのユダヤ人協会との関係を改めよう、という決定を導かせた。両者の関係は、新たな局面に移ったのである。そして、この関係の変化は、満州に陸軍大佐安江仙弘と特務機関長樋口季一郎が赴任することと関係していた[5]。彼らはハルピンのユダヤ人協会の活動が容認されるような雰囲気を醸成しただけでなく、この時期にハルピンのユダヤ人協会が精力を傾けていたナチズムの殲滅からヨーロッパの多くのユダヤ人たちを救済する、という活動を支援したのである。

1937年にハルピンで開催された極東ユダヤ人の第一回大会（極東ユダヤ人大会）が公式的な東京（日本政府）の満州のユダヤ人に対する関係改善の明証となった。その大会には中国の各省と日本（神戸）から12の代表団が参加した。安江仙弘大佐に加えて樋口季一郎特務機関長が大会の来賓となり、式典でスピーチを行った。彼は、いろいろな分野におけるユダヤ人の業績を高く評価してユダヤ人によって自分たちの国家が建設されることを望む、とスピーチした。これに関連して樋口は、日本人はこれまでユダヤ人に人種的にもそれ以外の面でも偏見を抱いてこなかったし、現在も抱いていない、と強調した[6]。このようなスピーチは入念に準備されていた、と思われる。このスピーチで特務機関長の樋口がハルピンに滞在する期間（1937年８月から1938年７月）のユダヤ人に対する日本の方針が示されたのである。大会では、主にこの地域のユダヤ人の宗教的、文化的、社会的生活の問題が議論された。次の点は明らかである。この大会で日本の政治が依拠する方針が示された、ということである。すなわち、この大会の決議の一つで、ユダヤ人協会を共産主義との戦いに編入することが表明されたのである[7]。

一方で、ヨーロッパからは益々不穏な情報がもたらされるようになった。ドイツやオーストリアのユダヤ人は他国で避難できる場所を探していた。しかし、周知にように、誰も彼らのために早急に門戸を解放することはなかった。このような状況のもとで、国際的な居留地がある最も規模の大きい国際港、すなわち上海は彼らにとって都合が良かった。なぜなら、上海に行くのにビザは必要なかったからである。これはナチズムから避難した多くのヨーロッパのユダヤ人たちの流入を呼び起こすことになった。彼らの一部はソビエトを経由して上海に行ったのであるが、ハルピンにも滞在したのである。満州国の領域内に残留する事は禁止されていたのであるが、彼らはトランジットの場所として満州の地域を利用することができた。ハルピンでは、A.H.カウマンの権威が日本人たちに認められていたし、彼の組織者としての才能は、生存の危機から逃れようとしていたヨーロッパの同胞を救済するのに大きく役立った。

この時期、日本政府はいまだヨーロッパの難民問題についての対応を最終的には決定しは

いなかった。一方で、ドイツはさらに日本に対して圧力を加えてきた[8]。日本政府は、アメリカ合衆国との経済的な関係の回復と満州におけるユダヤ人の資本を引き入れたい、という願望を持ち続けていた。結局、1938年12月に東京の当局は、この錯綜した問題に対する自分たちの立場を決定したのである。日本の主要な大臣をリーダーとする会議（五相会議）において陸軍大臣板垣征四郎が作成したユダヤ人に対する政策大綱が承認された[9]。その大綱は実務的な考えに基づくものでありユダヤ人の資本家と専門家を利用することを想定していた。このことにドイツは明らかに苛立った。

この1938年12月にハルピンにおいて極東ユダヤ人協会の第二回大会が開催された。この大会には難民の流入で援助が必要となっていた上海の協会の代表たちが参加していた。このような状況にあってA.H.カウフマン、すなわち指導者にとって日本人たちの信頼を維持することが重要だった。それが無ければ、地域のユダヤ人が活動することもナチズムから逃れてきたヨーロッパからの同胞を援助することもできないことは明らかだった。彼はこの目的を達成した。なにより日本人たちは彼を信頼した。さらには1939年５月に彼は日本に招聘され盛大な歓迎を受けることになった。

1939年９月１日に始まった第二次世界大戦と上海におけるヨーロッパからのユダヤ人難民の問題は極東ユダヤ人協会の第三回大会の招集を促すことになった。会議は、1939年12月末に開催された。主要な議題は、上海に残留していた17000人のユダヤ人難民のことであった。参加者たちは日本と満州当局に対してユダヤ難民に満州国へのビザが与えられることと彼らのために就労の場所を用意するように要請した。しかし、それは実現されなかった[10]。

1940年９月にドイツ・イタリア・日本の三国同盟が調印された。1940年12月に予定されていた第四回極東ユダヤ人大会は開催される事はなかった。この大会は、ドイツの圧力を受けていた日本人たちによって開催が禁じられたのである[11]。

1941年12月７日のパール・ハーバーへの日本の攻撃と太平洋における軍事行動の開始は、ユダヤ人協会の活動の条件を変化させることになった。ハルピンのあらゆる移民の団体と同様に、ユダヤ人協会も戦時期における防衛のための資金と負傷および罹病した日本軍人ための資金を集めることになった。このようにすることが協会を維持していく唯一の道であった。それとともに、ユダヤ人協会とヨーロッパからのユダヤ人避難民に対する政権の処遇に感謝する、という気持ちは疑いなく衷心からのものだった。

ヨーロッパのユダヤ人の状況と比較すれば、良好な状況であったけれども、東アジアにおける他の協会と同様に、ハルピンのユダヤ人たちも自由である、とは感じられなかった。ここでの日本の体制は、あらゆるものがそこに収斂されてしまうのだが、占領によって成立したものであり、さらにこの日本の体制は戦時下で運営されていたのである。日本人たちが、移民たちを民族的な指標によって迫害しなくても、移民たちとフランクに接するということはあまりなかった。

協会は、苦しい時代を生き抜くことになった。協会の人数は、絶えず減り続けたし、活動

の範囲はせばめられた。1943年にはユダヤ系の雑誌である「ハジェゲル」と「ヨブロペイスキー・ジイズニ」は廃刊となった。それより以前の1940年にはユダヤ人の若者の多くが学んだ第一商業学校が廃校となった。それでも、ユダヤ人協会は、ユダヤ人の宗教的、文化的、教育的な要請に応えるために活動する組織を維持したし、ユダヤ人のために医療活動や慈善活動を行った。他のロシアの移民たちがそうであったように、ユダヤ人たちも日本語と日本－「日が昇る国」－の文化を学ぶことが義務付けられた。ユダヤ人たちは、協会で作製した募金箱に旭日を付して活動した。しかし、ハルピンにおける離散ユダヤ人の存在の歴史は止まることなく終焉に近づいていた。

1945年８月17日、日本の占領に終止符が打たれソ連軍が満州に入ってきた。このソビエトによる占領体制はハルピンのユダヤ人協会に壊滅的な一撃を齎した。

ハルピンのユダヤ協会と日本の占領当局の関係史をまとめるとき、次の点を指摘しておかなければならない。その関係はとても複雑で多様な性格をもっているということである。この歴史の全てを記すことは到底できない。研究は継続されなければならない、ということである。

注

1　イスラエルに祖国の再建ないしはユダヤ教を中心に文化復興を推進する運動を行う人たち。

2　ユダヤ教の法律学者。

3　Takao Chizuko. The Birobidzhan Project from the Japanese Perspective // Mizrekh. Jewish Studies in the Far East. – Frakfurt am Main – Berlin – Bern – Bruxells – NewYork – Oxford – Wein: Peter Lang. P. 49.

4　См. подробнее: Marvin Tokayer and Mary Swartz. The Fugu Plan: the Untold Story of the Japanese and the Jews during World War II. – New York: Paddington Press, 1979.

5　安江仙弘（やすえのりひろ）1881月１月12日－1950年８月14日。樋口季一郎（ひぐちきいちろう）1888年8月20日－1970年10月11日。

6　Фридман М. Харбинская еврейская община под руководством д-ра А.И.Кауфмана. // Бюллетень Иугуд Иоцей Син. – Тель-Авив, 1999. №. 361. С.89.

7　Там же.

8　Krebs G. The “Jewish Problem” in Japanese-German Relations, 1933-1945 //Japan in the Fascist Era. Ed. By Bruce Reynolds. – N.Y., 2004. P. 117.

9　Goodman D., Miyazawa M. Jews in the Japanese Mind: the History and Uses of Cultural Stereotype. – N.Y. 1995. P. 111.

10　Фридман М. Указ. соч. С.39.

11　Krebs G. Op. cit. P. 117.